

---

栄えあるイメージとイデオロギー——パーシー・エルンスト・シュラムによる中世支配者の図像研究

二宮 望 (京都大学)

---

ドイツの中世史家パーシー・エルンスト・シュラム(1894-1970)は、青年期に美術史家アビ・ヴァールブルクの薫陶を受け、その後オットー朝のドイツ皇帝を中心にした歴史研究に向かった。彼の一九二〇年代のテキストにはこのハンブルクの美術史家の影響が顕著であり、そこでは図像資料が積極的に活用された。第一次大戦の敗北を経験したシュラムは、同時にワイマール期に蔓延していた愛国主義的な風潮をも共有していた。本発表は、この時代の彼のテキストを読み解くことで、中世を美化するファンタズムが彼のイメージ論といかなる共犯関係にあったのかを明らかにする。

第二次大戦中はナチ体制下の国防軍最高司令部首脳部(Wehrmachtführungsstab im Oberkommando der Wehrmacht)における戦争日誌の責任者、戦後は中世権力象徴研究の大家という屈折した肩書は、以後この歴史家の取り扱いを厄介なものにした。つまり先行研究では、ナチスへの関与を糾弾し、その学術的貢献を等閑視するか、はたまたそうした負の過去については口をつぐみ、もっぱら戦後の高水準な象徴研究だけを持ち上げるか、どちらかの論調に落ち着く傾向がある。しかし本発表は、むしろこの歴史家を全体主義に近づけた厄介さのうちにいまだ考察に値するものを見出す。むしろ、こうした逆説的な態度は、シュラムを歴史修正主義的に是認することではない。彼の支配者図像研究に潜んでいたイデオロギーを、歴史学の、あるいはイメージ研究の問題として引き受けなおすことこそがここでの課題なのである。

本発表は、まずシュラムの初期エッセイ「中世に対するわれわれの関係について」を取り上げる。歴史に沈潜することで中世の真価を見極めようとするシュラムの態度は、同じ時期にセンセーションを巻き起こしたエルンスト・カントーロヴィッチの『皇帝フリードリッヒ二世』と合わせて考えると興味深い。この二人の中世史家は、各々の仕方でドイツ皇帝の中に政治的英雄の姿を幻視した。シュテファン・ゲオルゲの栄華な詩句を想像力の源泉としたカントーロヴィッチに対し、シュラムは文字通り中世の支配者イメージの中にファンタズムを見たのである。

ヴァールブルク文庫での講演をもとにした論文「初期中世美術における支配者イメージ」は、こうした文脈において示唆的である。この論文でシュラムはヴァールブルク流の図像定型論を駆使し、政治神学と結びついた皇帝の権力表象を分析した。そこで浮かび上がってくる「皇帝の栄光」とは、緻密にして横断的な歴史学の帰結であり、そしてまたそうした解釈を可能としたイメージ研究の条件でもあった。支配者イメージを眺め

るシュラムの眼に映っていたのは、輝きに満ちた皇帝の崇高さではなかなただろうか。本発表は、シュラムの政治的図像学に内面化されていた「栄光」という美学的位相の解明を試みる。